父がかえってきていたら

緑ガ丘小六年　古賀哲也

その日は土曜日だった。ぼくは北原君といっしょに、どんぐりとりに行っていた。

どんぐりをとって帰っていたら「ドーン」とおとがしたので、なんだろうなといいながら帰っていたら、自転車のタイヤがパンクしたので、おして帰りながら、父におこられるだろうな、と考えて家についた。

こたつの中にはいっていたら、母が帰った。となりの、おばさんが走ってきて、母に「三川鉱のこうぐちで爆発のあったげな。」といわれたので、母は「ごはんをたべよってよか」といって、どこかへいった。ぼくはすこししんぱいだったけれど、父はこう内だからだいじょうぶだと思いながら、ごはんをたべて、テレビを見ていたら、母が帰ってきて「もうねとかんなんよ」といって、かけだしていったので、ぼくは、ニュースで三川鉱爆発の放送をずうっと見ていた。

ぼくは夜どおしねむれなかったそのうち、死者は四百人にもなって、ぼくはだいじょうぶだろうかと考えながらも「なあに父さんが死ぬもんか。」と一人ごとをいって、ニュースを見ていた。

朝になった。

ぼくたちは、それからずうっとだいじょうぶだろうかと考えていたら、母がなきながら帰ってきたので、父はもうだめだったんだと思った。しんるいの人が「まだ見つからない」といったので、すこしおちついた。

しばらくすると、近所の人がきて「遺体があがりましたから、遺体をかくにんしてください」といってこられたので、ぼくはびっくりしてじいっと立っていたら、なみだが出てきて、ぼくはなにがなんだかわからなくなって、どうしていいかわからなくなった。

そのうちぼくの家は、しんるいの人のなき声で、いっぱいになった。いもうとはなんにもしらないで、きょろきょろしていた。

そうしているうちに遺体がついた。母は遺体のはいっているはこをあけて、ぼくたちをよんで「もう父ちゃんは帰ってこんとよ」といいながら、ないていた。それからぼくは、会社がもうすこしはやくたすけていたら、父はたすかっていただろうに、と考えながら、心の中で「会社ばかやろ」と、どなった。

つりや、うえきをいじるのがすきだった父、母がはたらきにいっているので、ときどきはやく帰って、ごはんをたいていた父、もうもどってこないんだ、と思うと、なみだが出てくる。

会社はなんでもお金で、かたづくと思っているが、そんなことよりも、もとのままの父を返してもらいたい。それから、第二組合ができていなかったら、父はきっと死んでいなかっただろう。

ぼくは父が会社から帰って、自転車のパンクしたことをおこってもらいたいんだ。

父の死と願い

荒尾三中三年　末松正光

十一月九日の三時十五分、それは僕たちにとっては、どんなことがあっても忘れられない日となることでしょう。丁度、父の乗った人車が、上がってくる時間だったそうです。僕はその日午後二時三十分ほどから学校に行って野球をしていました。兄は三時十分だと言っていたからすこしすぎた頃、腹にひびくような音がして真黒い煙のようなものが上ったのを、いまでもはっきりおぼえています。

その時には何だろう、たぶんジエット機のマッハを越える時の音だろうなどといって気にもしませんでしたが、家に帰ってテレビの臨時ニュースで三川鉱の爆発と出た時には、ひやりとしました。しかし、負傷者が二十人程度で死人はないということだったので、父は坑内にいるのだからと安心をしていましたが、後になるにつれて事故の大きさが判り、びっくりして母にも事故のことを話しました。母は三川支部にいった後、兄は地域の災害対策本部に行き、僕は妹と二人で留守番をしていました。

十時過ぎになって兄は帰って来て父が死んだ場合のことや、後のことをいろいろと話したので、僕もそのことについて考えました。母は十二時頃に帰ってきて、「父ちゃんはだめだった。」といわれました。やはり兄の考えが当っていたのです。

僕たちは遺体を引取りに本所の体育館まで行きました。そこには棺桶が六十余り置いてありましたベニヤ板のそまつな棺桶の中で、寝たような表情で置かれているのを見ると頭の血が一ぺんに凍りつくような思いでした。葬式後、組合の人たちの話や、父の日記で会社のやり方のひどさを知りました。

事故前にも、モーターの出火や落磐事故などがあって、組合から抗議をしていたのです。それを会社は責任のがれをしようとしているのです。三池争議前の三池炭鉱は、炭塵爆発など起らない炭鉱でした。しかし争議後の炭鉱は、保安要員は三分の一にし、出炭をあげるための強制労働はやるというような、資本家の金もうけのためには人の命などどうでもよいというような炭鉱に変りました。

それで起るべくして、今度の事故は起ったのです。しかしながら会社は保安は十分であったといい遺族の生活保障も満足にせず、何年か後に何かの会社を作り、希望者はいれるようなことで、ごまかそうとしているのです。このような資本家のあくどさや、会社の矛盾には腹が立ってなりません。

このような事故を起さないために会社との団体交渉を常にやって保安対策の完備を徹底させて下さい。これが僕たち被災者のお願いです。

多くの人に伝えたい

（西原社宅）　藤本信男

戦後最高といわれるあの三川鉱大災害も、一周忌をすぎた。四五八名の方々の冥福を祈る。しかしまだ、半殺しにあった数百名の人が療養している。

現在、入・通院のCO患者が日夜病気と斗っている。ほとんど外部に表われず、内部いわゆる肉体の奥深く浸み込んでいる。全く全部といっていいほどの神経障害である。この人たち以上に、まだ意識すら回復しない者もいる。いったい誰がこんな姿にしたのか?。なんのためにこうも苦しまなければならないのか?。

私はほんとうに怒りと悲しみで胸が張りさけんばかりである。そこであのときの記憶をふりかえってみようと思う。

私は二六卸の仕繰工であった。その日の仕事も無事終り、帰り着到があり休憩場を出たのが十五時十分ごろ。ケージの所に着いたらケージが動かない。係員らが電話していたが通じない。どうしようかと一同話しあった結果、二六卸の三片から二二卸へ通り本線へ出ようということになった。結果的にはここが貫通していたから命があったわけだ。

ポンプも止り、電灯も消えていた。採炭も〝どうしようもない〟といった顔で座っていた。私と同僚のS君は先頭にいた。とにかく本線へ行けば、ようすがわかるだろうと思っていた。そのときである、煙りがきたのは……。

私とS君は〝なんだろう〟と思った。ケーブルの故障だろうか?とにかくタオルで口をおおった。このときから少々息が苦しくなりノドが痛くなり頭が重くなった。後をふりかえると、ずっと遠くに灯が見えた。

S君が「ちょどガスのようだ」といった。私も「ほんなこつな」といい、歩を速めた。途中で一緒になった人たちと歩いていたら、その中の一人が急に倒れた。ヒザからガックリといった。あとからわかったわけだが、電気の係員だった。顔面真っ青である。それでもカバンの中から一枚の図面をとり出して見ていた。「これから先は危いから五片まで行こう」といった。私は、係員が倒れたとき、なにかしら恐ろしくなった。私はここについたとき吐き気がした。すこし顔が青くなっていたろうと思う。

緊張の時間が過ぎていった。幸いガスはここまで来ないようだった。そうするうち、何百名という人が集ってきた。それぞれドブ水を水筒に入れる者、タオルをしめすもの、ただぼんやりしている者さまざまである。

空白の時間が流れた。何時間たったろうか?。〝ガスがない〟ということで救出作業にかかった。ところがどうであろう。息もたえだえになった人が、何人も現地点へかつぎこまれる。人口呼吸をする。そうするなかで息が絶えた人もあった。誰かがいった「まだ先には何十人と倒れている」と…。

S君と本線へ出てみた。またドギモをぬかれた。見まわすかぎり死人の山である。私は一瞬、ボーッとなった。気をとりなおし、人口呼吸をしたがダメだった。そのときS君がいった。

「藤本君、もう炭鉱はいやだ。もう下りたくない!」と。

同感だった……。〝南無妙法蓮華経〟ととなえ、尿を出す者、のたうちまわる者、さけぶ者……。まさに〝これが地獄絵というのだろう〟と思った。

それから数時間後である。医療班、救護隊、担架がきたのは。私はS君と他の二人、計四人でS君をかついで、宮浦連絡坑道へ行った。もう一回ひきかえして倒れている者も連れてこようかと思ったが、自分の体が動かない。やむを得ず人車に乗りこんだ。

途中なにやかやとあったが、ようやく宮浦坑口へ着いた。午前〇時である。フロの中でS君と「助かってよかった」と一言。ただ、お互いに顔を見あわせるだけで、なにも言葉が出ないのである。私はここではじめて〝生きている〟という実感がわいた。

私は静かに記憶をたどろうとしたがダメである。興奮してくる。これを書いているうちにも、頭がガンガンしてくる。もう二度とこういう災害を起してはならない。いや起させてはならない。

私は軽症で幸いだったが、多くの人が病気とたたかっている。現状のままでは悪化してくるんじゃなかろうかと疑問に思う。私はもっともっと多くの人に、CO中毒についてアッピールして理解してもらいたい。そして早く完治できるよう願いつつ筆をおきます。

九大病院に入院中の清水正重さん。病状は一症度、知能二才程度

〝ひやめし〟

宮浦・高椋竜生

いつも
まっさきに
ひやめしをくうのは
はたらきに出ていく
妻――
そののこりの
ひやめしをくいながら
ひとくち
ひとくち
妻の
苦労をかみしめている
私――

（一九六四・一一・一六）

極月（ごくげつ）

宮浦・高椋竜生

日めくり
ひとつない
さむざむとした
灯の下で
札っ気もない
ゼニをかぞえながら
ためいきをついている
父のそばで
白く息を吐きながら
ぽそぽそと
ひとりごとをつぶやいていた
母――
「もういくつねるとお正月」
そんな夢を見ていたころの
私が――
いま
ごくげつの
ためいきをつく

（一九六四・一二・一二）